

2010年1月27日

愛知県公立大学法人理事長 清水哲太 様
愛知県立芸術大学学長 磯見輝夫 様
愛知県知事 神田真秋 様
愛知県議会議長 吉川伸二 様

DOCOMOMO Japan 代表
鈴木博之
(青山学院大学教授・東京大学名誉教授)

愛知県立芸術大学校舎・建物群の保存・活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的の一つとする、世界52支部(48国)が加盟している近代建築保存のための国際的な非政府組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement = モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織)の日本支部です。

このたび貴愛知県立芸術大学のキャンパス再開発計画により、建築家吉村順三の設計した当該校舎・建物群の存続が危ぶまれる旨聞きおよびました。DOCOMOMO Japan では先に貴大学キャンパスの吉村順三の設計による全ての建築物を、教育施設としての完成度の高さと、建築群としての複合的価値の両面から高く評価し DOCOMOMO Japan の125選のひとつに選定させていただき、そのお知らせを日本建築学会会長と連名にてお送りしております。今回あらためて、当該建築物群の歴史的価値、文化的価値をご確認いただきたく、この校舎群の見解書を添付して保存・活用に関する要望書を提出いたします。

竣工以来45年を経て、教育環境の変化や社会情勢の変化により、既存の建物に不都合が生じていることは承知しておりますが、それらは、専門家による検討などにより、克服可能なものがほとんどであるとも認識しております。したがいまして、価値あるキャンパスと建物群を一時の不都合を理由に短慮によって喪失することは大きな損失と考えます。

貴下におかれましては、美しい自然に囲まれた、もはや歴史的価値をもつに至ったといえる、この建物群とキャンパスの文化的資産としての価値とともに、創設時代に注ぎ込まれた大学関係者と設計者の先見的な意図と尽力をお汲みとりいただき、その保存・活用について再考くださいますよう、格別の配慮を賜りたくお願い申し上げます。

またこの度のキャンパス再開発計画に伴って、建築関係の有識者にこのキャンパス再編計画に関してヒヤリングをされたとお聞きしておりますが、次代に向けてのキャンパスのあり方を共有するために、その有識者の見解と、検討されている再開発マスタープランを公開してくださいますようあわせてお願い申し上げます。

なお、本会は、この建物群の保存・活用について出来る限りのご協力をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具

愛知県立芸術大学校舎・建物群についての見解

DOCOMOMO Japan 委員

名古屋大学大学院環境学研究科建築学系
准教授 西澤泰彦

愛知県立芸術大学のキャンパスと校舎・建物群は、周知の通り、当時、東京芸術大学美術学部建築科教授を務めていた建築家吉村順三の設計、銭高組・大成建設・矢作建設の施工により 1965 年から 1974 年にかけてそれぞれの建物が竣工しました。

以下、キャンパスとそこに建てられた建物群について、評価を示すこととします。

(1) キャンパスと建物群の構成

南北につづく丘陵上に講義棟を配し、北に大学本部、客員教授住宅、南に学生ホール、図書館・芸術資料館、東に音楽学部棟・音楽棟、西に美術学部棟・アトリエ群、デザイン棟、丘陵地の高低差を生かしながら奏楽堂、体育館、学生寮、教職員クラブ、公舎群、教職員住宅群、総合研究棟、機械室棟等をもうけた南北と東西を軸線としたマスタープランは、緑多い丘陵地の中に、一つの都市を造るかの如く、配置されています。特に、キャンパス中央に位置する講義棟は、キャンパスの骨格として位置していますが、これは、キャンパスを都市に見立てれば都市のメインストリートの役割を果たしております。当時、全国各地で、丘陵地や田園地帯に郊外型の大学キャンパスが造られていくことが流行しましたが、その中で、敷地に秩序を持たせるキャンパス計画として高い評価を与えることができます。

また、これらの建物によってキャンパス各所に確保された中庭は、日本建築によく見られる「間(ま)」としてとらえることができ、これらが適度にキャンパス内に配されることで、講義棟によって造られたキャンパスの軸線が生み出す秩序とここで生活する人々に与える緊張感に対して、安らぎと余裕を確保するものであります。この秩序と緊張感、そして安らぎと余裕が、芸術大学ならではの創造性を成立させる源となっているといえます。

(2) 鉄筋コンクリート造建物に対する評価

キャンパスを構成する多くの建物が、鉄筋コンクリート造打ち放しの建物であることは周知の通りです。鉄筋コンクリート造建築は、20 世紀の産物ともいえる建築であり、その構造は自由な造形表現を可能にするたいへん優れた構造であります。そして、その発展過程を鑑みると、内外装材を付加しない打ち放しという仕上げ方法は、鉄筋コンクリート造であることが一目瞭然である表現方法であり、鉄筋コンクリート造ならではの表現方法であります。日本では、1920 年代にその萌芽を見ますが、全国的に建てられていくのは 1950 年代後半から 1970 年代前半のいわゆる高度経済成長期であり、それは、いわば、高度経済成長の産物であり、その時代を示す建築構造と建築表現であります。それは、愛知県立芸術大学の場合、特に、講義棟によく表れているといえます。また、多様な表現が採られた結果、鉄筋コンクリート造建築による群建築ならではの、多彩な造形美がキャンパスに表現されているといえます。

一方、鉄筋コンクリート造打ち放しについては、その後の維持管理を怠ると、外装材のあ

る建物に比べて外壁の汚れやコンクリートの劣化という問題が生じるのもすでに指摘されていることであります。しかし、これは、打ち放しという方法の問題ではなく、竣工後における維持管理に関わる問題であり、建物が本来有する価値とは無関係の問題であります。東京文化会館や名古屋大学豊田講堂をはじめ、1950年代後半から1970年代前半にかけて日本各地で建てられた鉄筋コンクリート造打ち放しの建物について、さまざまな維持管理と改修によって本来の姿を維持しながら使われ続けている名建築は多々あります。もちろん、愛知県立芸術大学の建物も、それらと同様の価値を有するとすでに判断されております。

(3) 芸術創造の場としてのキャンパスと建物群

上記のような価値を有するキャンパスと建物群の中で芸術教育をおこなうことは、たいへん有益であり、特に芸術の基礎教育に求められる感性の養成において、キャンパスと建築群はその場を提供する最良の施設であります。今、進められているキャンパス再開発計画では、既存の建物の多くが失われ、また、キャンパス全体の秩序と緊張感、安らぎと余裕が失われる可能性があります。そのような事態になれば、芸術大学として社会から求められる教育の可能性を失いかねません。また、愛知県立芸術大学が今後目指している国際化、交際交流の促進として外国の著名な芸術家をキャンパスに招いた場合、彼らがその事実を知れば、既存の建物群の喪失を嘆くばかりか、大学の見識が問われる事態も予想されます。

以上、DOCOMOMO Japan として、専門家の立場から、愛知県立芸術大学のキャンパスおよび建物群について見解を記しました。